

## 絵本のお話と指人形づくり（10月28日開催）

日時：平成30年10月28日（日）14：00～16：00

会場：えほん図書館おつきさまのへや

### ◇ 概要

前半は講師による著作の読み聞かせと絵本作家を目指し初の著作が出るまでのエピソードや、影響を受けた本の紹介をトークしていただいた。後半は講師のライフワークである指人形づくりを参加者に挑戦してもらった。

#### （前半：トークパート）

◇著作「ぎょうぎの日」の読み聞かせ。

◇2012年に札幌に移住した。生まれは福井県だが、小4からは北広島に住み、北海道教育大学岩見沢校図工科へ進学した。

◇図工科では、絵画、木工、彫塑などに取り組んだ。当初は学校の先生になりたいかたったがそのうち自分で作る人になりたいと思うようになった。

◇大学卒業後はいろいろなアルバイトを経験した。なかでもきのとや本店でのショーケースディスプレイのバイトは季節ごとの企画からディスプレイまで経験し、ハードだったが勉強になった。

◇何が作りたかが分からなかったが、初めての個展で子どもの頃の自分の写真をコラージュし詩をつけたものを、スクリーンでプリントしたものを展示した。その時に自分の作りたものの真ん中に「子供時代」があると気付いた。

◇何が作りたか迷っていた時に出会った絵本が「百万回生きたねこ」や「ぼくを探しに」「大きな樹」であり、まるで映画を読んだような感動を覚えた。そこから絵本を読むようになり、絵本が好きになったのが高じて絵本を作りたいと思うようになった。



◇札幌には児童書の出版社がないが、雑誌で「あとさき塾」の募集を見つけてあとさき塾のオーディションに応募したら合格したので上京することにした。  
(応募した時の絵本「えび」を持参してくれた) 28歳の時だった。

◇あとさき塾とは編集者の土井章史さんと小野明さんが主宰する絵本作家養成塾で現在約30年続いている。卒業生には島田ゆかさんや荒井良二さん等。

◇9期生として1年間2週間に1度の勉強会や年6回ある特別講座に参加した。土井さんがビールを飲みながらコメントするようなざっくばらんで楽しい雰囲気だった。特別講座のあとには、絵本作家さんとの交流会があり、そこで人脈が広がった。

◇土井さんはフリーの編集者として300冊以上の絵本企画を担当してきた編集者で、講師の著作では「ぎょうざの日」「ぜったいわけてあげないからね」「とこちゃんのながぐつ」を手がけてもらった。

吉祥寺にあった名物絵本屋さんの「トムズボックス」(2015年閉店)も主宰しており、毎月店内で原画展を企画していた。

◇小野さんは編集者というよりは450冊以上の絵本の企画を担当してきたエディトリアル・デザイナーで、講師の著作では「しゃもじいさん」「おもちのかみさま」を手がけてもらった。小野さんから初めて言われた言葉「今日からはきみたちを作家として扱う、出版を前提に意見します」が印象的で嬉しかった。

◇あとさき塾では参加者全員でラフ(鉛筆で描いたもの)の回し読みをしてそのあとに土井さんと小野さんがコメントするという流れであった。最初はラフをつくれなくてどうしようと焦っていた。あるとき土井さんの「大人は頭で考えるが子どもは身体で考える。絵本の読者は子どもだから、子どもに合わせて考える」との言葉にショックを受けた。当初どこかかっこいいものを作ろうと思っていたが、子どもの頃一番楽しかった日を描こう、「ぎょうざの日」にしようとした。

◇テーマを決めたらどうやって「ぎょうざの日」を伝えようと悩んだ。最初は辛いエピソードを入れて対比してみたが、土井さんから「楽しいことだけ書けばいいじゃない、絵本は32ページしかないんだから」と言われたことを受けて余計なエピソードを省いた。

◇楽しかったことを思い出して描いていくと描くのも楽しくなった。ラフの原型が出来上がるのに1年かかった。

◇土井さんがラフを出版社に持ち込み、偕成社で出版されることになった。

◇今度は絵を描くのに苦労した。自分や家族を描くのが恥ずかしく、きれいな紙に刷られるのは恥ずかしい感覚があった。そこで紙や画材を変えて試行錯誤し、たどり着いたのがベニヤ板だった。ベニヤ板の質感や絵の具の色が少し沈む感じが最も適していた。

◇「ぎょうざの日」の原画の紹介。(参加者から感嘆の声があがった)文字は別版となっている。「ぎょうざの日」の原画はぎょうざを持つ女の子がメインとなっているが、土井さんがぎょうざをメインにしたほうがいと提案し、絵本の表紙ではぎょうざを拡大している。原画を描くのに1年かかった。



◇初めて絵本が出た時は嬉しくも信じられない、不思議な気持ちになった。

◇「ぎょうざの日」は2001年に出版されるも絶版となり、その後2016年に再販となった。絵本は全般して時間が経つと再販化しにくい、コープさっぽろの「えほんがトドック」（2歳までの子どもがいる世帯が申し込むと無償で1年間に4冊の絵本がプレゼントされる）に選ばれたことで再販された。小さな絵本屋ひだまりの店主青田さんがコープさっぽろに推薦してくれたおかげだった。「ぎょうざの日」が再販されたことでようやく客観視することができ、同書のあとがきに自分の想いを追記させてもらった。

◇自分が子どもの頃好きだったのは、「9月姫とウグイス」「ききみみずきん」「ちびくろさんぼ」。「9月姫とウグイス」は武井武雄さんの挿絵が美しい。

◇著作2冊目は「えんぴつのおすもう」であるが、苦勞した。自分の体験ではない絵本を作らなくてはと何度も書いたが駄目で、自室の机にうずくまって何も書けないと鉛筆で遊んでいた時に、鉛筆の姿を見て「えんぴつがおすもうしてるみたい」と発想したことがきっかけで絵が描けた。

◇鉛筆に続いて身近な文房具の絵を描き、絵に小さな詩を寄せて原宿の喫茶店で個展をした。その時の作品が「えんぴつのおすもう」に繋がった。個展に来てくれた人に「武井武雄さんが好きではないか」と指摘され、後日自分が子どもの頃に読んでいた絵本の挿絵が武井武雄さんだったと気が付いた。

◇思い入れのある絵本として「地平線のみえるところ」（長新太）を紹介。最初読んだときは面白さが分からなかったが、吉行淳之介のエッセイで「上質な大人しか長新太のナンセンスの面白さが分からない」とあるのを読んでさみしい気持ちになった。その後自身の子どもが生まれ、2歳の時に読んでみたら息子が心配になるほど大爆笑したのを見て「身体の絵本とはこういうものか」と分かった。その後息子と一緒に何度も何百回も読んだ。

◇他に好きだった絵本として、ピクシー絵本が好きだった。人形劇が好きで、同時に小さなものが好きだった。そうした思いが今もライフワークの人形づくりに繋がっていると思う。

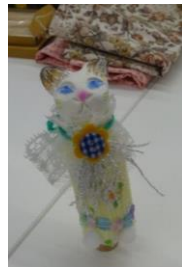
◇新刊「ぬかどこすけ」（11月下旬発売予定）の紹介  
糠床の質感を出したくて、絵の具に糠を混ぜて、ボードに描いた。



（後半：指人形づくり）

◇当日は講師が自身の指人形の作品を持参して展示したので、展示を見てもらいながら、講師が最初に解説した。その後は講師が制作してくれた人形の頭を参加者自身で2種選ぶところから、スタートした。

◇作業に使う道具やパーツ類は当館にあるものをかき集めて準備したほか、講師がかわいいうりボン類を持参してくれたので、パーツを選ぶ楽しさもあるようだった。講師は参加者のテーブルを回り、具体的にアドバイスをして廻ったが、講師の発想力に改めて感心する方が多かった。



◇作業に没頭して皆真剣に作っていたが、初対面同士でもお互い道具を譲りながら、和やかな雰囲気であった。人によって個性がはっきりと現れており、1時間で2体を完成させる人もいれば、パーツ選びに頭を悩ませ時間をかける人とそれぞれであった。

◇終了後は講師のご好意で、希望する参加者との記念写真タイムを設けたところ、好評であった。